

編集後記

川柳の部

宮塚 肇

長年にわたり編集委員を担当してこられた藤岡進氏の急逝に伴い、その後を引き継ぐことになりました。

同氏はふじさわ川柳大会をはじめ地域における活動に熱心に取り組んでおられました。それとは真逆で自分のことに精いつばいの私に務まるのかいささか不安を感じます。でも、お世話になつてきた多くの方々への恩返しのできない積りで積りでおります。

ご応募いただいた句について編集する上で留意したのは、誤字、定型からの外れです。後者は作者の了解を得られた句のみを修正しました。その他、字開け、記号の使用等は、作者の創作性・独創性を重視して原句のままにしております。

応募総数は、四十一句でした。前年より十句ほど増え喜ばしく思います。

サークルでの活動を通して、近年、気になるのは、

メンバーの高齢化と新規加入者の少ないことです。自己を中心とする人物描写が主体の現代川柳の傾向からすれば、人生経験が豊富な年輩者に愛好者が偏るのは致し方ないことなのでしょう。今回の応募者も大半が七十代、八十代の方でした。文芸であるかどうかはさておき、サラ川をはじめ、読む／聞くという受け身で楽しむ方は、世に広く定着しております。一方、作って楽しむ方は、敷居がかなり高いようです。

本年、我がサークルでは「川柳入門／人生を楽しむ」というタイトルで、全二回の入門講座を公民館と共催しました。一回目は講師のお話の聴講、二回目は互選会の体験にしました。句を創作し、鑑賞し合う座の文芸としての川柳の楽しみ方を知っていただきたかったのです。

市内の各サークルでも様々な活動をされております。試行錯誤の地道な取り組みの積み重ねが藤沢市の川柳の裾野を少しずつ広げることになるでしょう。今後市民に公開する活動を執拗に継続することが肝要に思えます。同じ五七五の短詩文芸である俳句の方は、テレビの人気番組の影響で愛好者が増えているのを羨ましく思います。

(2019年12月記)

俳句の部

堀口 みゆき

みらい創造財団の方々の文芸発展への積極的なご意向により、編集会議も2回にわたり開かれました。検討事項として一番大きな問題は、参加者の高齢化による作品数の減少傾向がどのジャンルにもみられることでした。幸いなことに俳句は昔に比べると参加者が減少しているものの、高校生対象の俳句甲子園の開催、テレビ番組による大衆化により新たな作者が増えているように感じます。若年層の活字離れに替わる媒体としてインターネットが筆頭に挙がると思いますが是非はともかく今、作り手を増やすには俳句を身近なものとしていかに親しみをもってもらうかが必要ではないでしょうか？ かつて小学校の現場で音楽や図工の授業に取り入れた俳句が、その後子どもたちの成長に伴ってどのように変化していったか知りたいところです。音楽の授業では、それぞれ自作の句に合った楽器の使用。例えば、雷、祭は太鼓、シンバル。虫の声は鈴、トライアングルを使うなど楽器で表現。図工の授業で

は校庭の樹々を写生する際、木をモチーフに俳句を絵に付ける試みをしました。コラボレーションにより、ジャンルを超え共通する部分が見えてくるはずです。音楽の場合、リズム、間のとり方、強弱、等。絵画の場合、物の配合、色彩の選択、遠近、等。昨秋、俳句の会を鎌倉芸術館にて開催しましたが「音楽と俳句」をテーマに「月」を中心に「月光の曲」「月の光」、日本の月の唱歌、など秋の曲の生演奏を聴いた後、聴覚を通して音楽と俳句の共通する季節感や国際比較、季語の問題等、参加者全員で話し合うイベントを行いました。コラボレーションは既成概念の払拭にも繋がるように感じます。

今回「文芸ふじさわ」の俳句年齢は50歳以上の方ばかりでした。私の所属している結社は全国の10代から90代まで和気藹々と切磋琢磨しておりますが、それぞれ結社に属しておられる方の参加が減少しています。原因は「文芸ふじさわ」といった文芸誌を知らない、自分の所属の会誌だけでよい、べ切を忘れたなどの理由で参加されない場合が見受けられます。次回からは非多くの方がご参加くださることを願っております。

短歌の部

短歌を詠むということ

太田 博

短歌を詠むということはどういうことなのか。三人のすぐれた歌人の言葉を考えてみたい。宮柊二は「うたは生の証明」「心は美しく言葉は正しく」といい、また、百歳まで生涯うたを詠みつけ秀歌を残した土屋文明は「生活即短歌」「上田三四二」は「日本語の底荷」といつて、作歌の上に実践した。作歌に当ってあらためて考えてみた。

短歌は五句三十一音からなる抒情詩である。したがって、情（こころ）をのべる詩といえる。詠う主題（テーマ）によって、自然詠、相聞歌、挽歌、生活詠、家族詠、社会詠、旅のうたなどにわかれる。人はそれぞれ環境、知識、経験などを異にするが、作歌に当ってはおのずとそれらが影響を与える。初心の人、修練をつんだ人を問わず、変りない。また、うたの巧拙についても、作歌歴が長いから良いうたが出来、初心者だから拙いとは限らない。そこで基本的に留意しなけ

ればならないのは何か。ひとつは、出来るだけ定型を守ること。言葉を正しく使うことが求められる。主題とした素材をしつかり見て、読者の心に伝わるように表現する。感動をしつかり詠うことが大切である。難解な表現をともしれば「良し」と思う風潮が一部にあるが、私はとらない。

作歌に当って最も大切な要素として、常に感性を磨くこと、調べ（韻律・リズム）を整えることが欠かせない。語句の配置、終句の工夫、句切れ、倒置、リフレイン、固有名詞の活用などさまざまな技法があるが、「調べ」は、表現に陰影を与え、余情（表現プラスアルファ）を付値し、作品に大きな影響を与える。

さらに、つけ加えれば、初心を忘れず継続して作歌を続けること、また、すぐれた歌人の歌集を読むこともおすすめしたい。

○…54集の投稿者は二十七名。前号に比べやや減少した。このところ三十名前後と少ない人数で定着した感がある。

ほとんどが常連だが、一人でも多くの参加をのぞみたい。

五行歌の部

前野 芳 民

皆さんのご協力で「文芸ふじさわ」を発行できました有難うございます。今回は皆さんの歌の中に

「変化」を感じました、今年はのんびり屋の私の目から見ても目まぐるしくいろんな事が動いているように感じました、特に災害に対する人の弱さを嘆く歌、今回の投稿歌の中にも今残しておかなければいけない歌が沢山ありました、たくさん推敲の後が読み取れる作品勢いで書いただろうなと思われる歌や読んだ人に映像が浮かぶ歌は私が好きな歌です、今年は歌の題材には困らない位いっぱいあったので一人ひとりの思いが歌に反映されています。

各歌会には歌作り以外に多趣味の方が多くお花の好きな方からは花の名前を使ってその花に成り代わって詠う方もおられます、また写真を趣味にされている方などは写真五行歌を載せて楽しんでいる方もおられます、自分とは違う世界を知る事ができる良い機会を与えて貰っています、中には誰にも云えない心の叫びを

五行にして他の方に読んでもらう事で気持ちの整理をして歌に助けられたと話される方もおられました一つの出来事でも人それぞれの捉え方でこんなにも違う歌になると考えさせられますその他には五行で毎回遊ぶ方の歌では歌会の最中大笑いしこんな詩を毎月考えるだけでも楽しいだろうなと憧れます、歌友の中には多種多様の歌が出来てくる事が編集をしていても楽しいです。

現代詩の部

山 田 美智子

新しい元号になり、新天皇の即位の行事が目白押し
の年でした。

昨年を表現する漢字は「令」。元号の由来が万葉集に
拠るもので、広く文化発展をも含んでいるとか。大和
の古来の縁を深く感じます。

反面、昨年は自然災害の多い年でもあり、多くの方
が災害の被害にあわれ、今もなお被災地の復興や回復
に時間を要している現状にあります。一日も早く安定
した日常が戻ることを祈るばかりです。

さて、文芸ふじさわ第五十四集を皆様にお届け致し
ます。他の部門よりはるかに少ない作品数ではありますが、
ですが、皆様の書きたい想いの結実でもありますので、
大切に編集作業にあたらせて頂きました。

日々の何気ない日常であっても、目線や感じ取り方、
見方の違いで新しい気づきや発見があるものです。

季節や天候といった自然を扱った作品、作者本人や家
族への想いにふと気づいた作品、それぞれが伝えたい

事や言い分をご自分の言葉を選びながら詩に託された
作品たちです。

詩は行間を読む——とも言われます。

空白の部分や行間にある隠された想いをあれこれと読
み解いていく楽しみもあります。

随分前、先人の詩人の方に教わった事があります。
コップを例に教えて頂きましたが、外観をコップだと
表現するのは詩とはいえない。中身を伝えて読者がコ
ップだと分かるのが詩だと。しかし暗喩や比喩を乱用
すると伝えたい事が分かりにくくなります。書く事に
ゆき詰まったら、形式や答えばかりを求めるより、何
だかんだ言うよりも書きたいから書く——それで良いの
ではありませんか。開き直りも良いのです。書いた作
品を読者の方がどのように捉えられるのか、あるいは
書きたい事を書く過程に自らが新しい発見をする——と
いう醍醐味が良いのです、とも。

令和元年の作品集の編集に携わり、気持ちを新たに
させて頂きました。皆様、どうぞ書き続けて下さい。
次集でまた、お会い致しましょう。

随筆の部

新田 慎二

ご承知のように「随筆」はテーマがほぼ自由に決められ、字数の制約こそあるものの、他のジャンルのように定型といったものがなく、かなり自由に自己表現ができます。ですから旅行記、暮らしの日常、趣味、ペット、過去の記憶、評論といったことなど自由に書くことができます。今回も面白い作品に恵まれ、楽しく読ませていただきました。

応募作品が38と多いものですから、個々の作品に触れることなく、一覧して気になったことについてお話しします。

文章を書いて一つの作品に仕上げる作業は仏像を作るのと似ています。木を削って作るにしても、土をこね合わせて作るにしても、仏像を、魂を込めて作り上げるという目的で作業することは同じです。まず、あらつばい形が出来てきます。それをさらに削って仏さまにしてゆくか、あるいは新たな土をつぎ足してゆくか、

そういった作業が必要になってきます。どちらの方法をとるにしても、最終形に向かってこまかな作業が求められます。なかには円空仏のように荒つばいままの最終形もありますが、いずれにしても作者の意図を具現化した心のこもった作品でなければなりません。

ですから出来上がった作品について再度チェックすることも必要な作業です。作りたいものになっているか、細かなミスはないか、をもう一度調べるのです。

文章ではそれを推敲と言います。書きたいことが書かれているか、論点がずれていないか、文体の統一性、文字の使い方、句読点の付け方、パソコンの場合変換ミスはないかなど、もう一度読み直してみてください。声に出して読むのもいいと思われます。せっかくの作品が細かなミスのため思い通りに読まれなかったら勿体ないことになります。

最後は題名です。いかに魅力ある内容であるかを読者にアピールするものでなければなりません。でないとな読者に読まれないままスルーしてしまいかねません。

そういった目で見直して、自ら作り上げた愛しい作品を世に送り出してください。作品は藤沢市や図書館に長期間にわたって保存されるはずで。